

## ランンキュラスのブランド化に向けた 切り前表の作成と湿式輸送による日持ち性の向上

### 1. 背景・ねらい

香川県におけるランンキュラスの切り花栽培は、昭和末期、県東部のさぬき市（旧大川郡長尾町、寒川町）から始まりました。平成18年には、ウイルス病の蔓延などで栽培面積は0.5haにまで減少しましたが、香川県農業試験場による茎頂培養技術の開発、「てまり」シリーズの育成が起爆剤となり、平成19年以降、県西部の三豊市にも拡大しました。現在、栽培は県下全域に広がり、約1.5ha（平成25年）まで拡大しています。

香川県では農業試験場がランンキュラスの茎頂培養による増殖技術を開発し、ウイルスフリー球根としてJAに優良種苗を供給しています。比較的収益性が高く、低コストな品目として、作付推進が図られ、既存産地以外でも面積が増えて来ていますが、産地によって、切り前、出荷形態が違い、県下統一のブランド化に向けた大きな障害となっています。

近年、ランンキュラスは全国的にも産地が増えてきており、他産地との差別化による優位販売を行うことが必要であることから、県オリジナル品種を軸として、香川県のランンキュラスのブランド化に向けて、切り前表を作成し切り花品質の均一化を図るとともに、日持ち性の向上に向けて、出荷形態の検討を行いました。

### 2. 成果の概要と特徴

#### (1) 収穫支援資料として切り前表を作成（図1）

従来、ランンキュラス切り花は蕾での出荷が基本でした。しかし近年、ほ場で開花させ十分に花弁が伸長した状態の大輪で出荷する産地が増えてきており、古くからの産地であり蕾出荷を行っていた香川県内の産地でも、切り前を検討する必要性に迫られました。そこで、生産者の収穫時の目安となるように、品種ごとに切り前の基準表を作成しました。

#### (2) 出荷形態の統一に向けた日持ち試験の実施（表1、図2）

産地と関西・関東の市場の協力により、香川県育成品種「小春てまり」と「雪てまり」を用いて、出荷形態の違いによる日持ち試験を行いました。

○両品種とも、ほとんどの区で市場に到達してから1週間以上日持ちすることが分かりました。

○輸送形態の違いでは、湿式で輸送することによって、日持ち性が向上することが分かりました。

○切り前の違いでは、堅めに収穫する方が若干日持ちは長くなりますが、緩めの方が満開時の花が大きくなることが分かりました。

### 3. 成果の活用面・留意点

(1) 作成した切り前の基準表は全ランンキュラス生産者と指導者に配布しており、口頭では説明しにくい収穫適期の指導における生産者と指導員の確認ツールとして、集荷場での‘目ならし’や、ほ場巡回時の資料として活用しています。

(2) 湿式輸送とは、切り花の切り口を湿らせた状態で輸送する方法です。

(3) 日持ち試験は、温度：25℃、湿度：60%、日長：12時間（午前6時～午後6時）、照度：1000

ルクスの条件下で行った試験です。

- (4) 日持ち試験の結果をもとに市場へPR活動を行い、有利販売につなげています(図3)。
- (5) 新規生産者には、湿式による出荷形態を基本として指導します。

#### 4. 主要なデータ等



図1 作成したランンキュラス切り前基準表

表1 輸送形態がランンキュラス切り花の日持ち性に及ぼす影響

調査機関：なにわ花いちば（一部抜粋）

品種	切り前	輸送形態	日持ち
雪てまり	緩め	乾式	△
		湿式1	○
		湿式2	○
小春てまり		乾式	○
		湿式1	◎
		湿式2	◎
雪てまり	堅め	乾式	○
		湿式1	○
		湿式2	○
小春てまり		乾式	○
		湿式1	◎
		湿式2	○

日持ち ◎：非常に良い（14日以上）  
 ○：良い（1週間以上）  
 △：あまり良くない（1週間未満）  
 湿式1：不織布を利用した保水材を利用  
 湿式2：ゼリー状の保水材を利用



図2 湿式による切り口の処理状況



図3 日持ち試験結果を活用した市場での展示状況

#### 5. 実施期間 平成26年度

本課題は、農林水産省新技術導入広域推進事業を活用しました。